

台湾との交流 特集

この特集では2010年以降の杉並区と台湾との交流活動と、台湾との関係が杉並区を特徴づける要素のひとつであることをご紹介したいと思います。台湾とのかかわりの起点には、「俺たち、日本人になったり、台湾人になったり、忙しいんだよ」、という戦後の復興期に日本と台湾を行き来していた人たちが作り上げたネットワークがありました。

2011年から中学生親善野球交流、2013年から「まるごと台湾フェア」、2015年には、杉並区が国立台湾戯曲学院（10年一貫教育で台湾伝統芸術を担う人材養成機関）と文化交流宣言書を取り交わし、「東京高円寺阿波おどり」の台湾公演が始まりました。2016年に区民が台湾を訪れ交流を深める「台湾友好親善ツアー」が始まりました。今はコロナ禍により活動を縮小せざるを得ない状況にありますが、近いうちに交流を再開できる日がくることを期待しつつ、その日のためにこれまでの活動を振り返っておきたいと思えます。（広報T）

交流自治体中学生親善野球大会

始まりは2010年。杉並区の野球関係者が日本と同様に野球の盛んな台湾と交流したいと台北駐日経済文化代表処（以下、駐日代表処）文化部長の要職でいらした林氏に相談をしました。2011年12月、東日本大震災の被災地、南相馬市の中学生軟式野球チームが台湾から招待され、杉並区のチームとともに台北近郊で初めての親善試合を行いました。翌2012年10月には杉並区区制施行80周年記念事業の一環として、台北市と南相馬市の中学生が杉並区を訪問し、杉並区の中学生チームと区内野球場で親善野球大会を開催しました。その後は台湾と杉並区で交互に大会を開催しています（2020年はコロナ禍のためオンラインで意見交換やレクリエーションを実施）。名寄市のチームも数年間、台北市と杉並区で開催された大会に参加し、野球を通じた国際交流を深めました。

現在、杉並区で開催される大会には、南相馬市に加えて交流自治体（南伊豆町、東吾妻町、小千谷市）の野球チームも参加するようになり、各自治体の野球少年たちはこの親善大会を目指して練習に励んでいます。交流協会では、杉並区での大会開催の際のボランティア通訳派遣や、台湾の中学生（選手）を対象としたホームビジットを実施しています。

また、台北市での大会開催の際には、応援ツアーを実施するなど、区と連携して大会開催に協力しています。



中学生親善野球大会集合写真

「まるごと台湾フェア」

東日本大震災の時に台湾の人たちがいち早く被災者支援のための募金活動を開始し、200億円を超える義援金を送ってくださったことをご記憶の方も多いことでしょう。昨年5月には駐日代表処をはじめとする台湾関連4

団体がマスクや医療用防護服を杉並区に寄贈してくださいました。

2013年に始まった交流協会主催の「まるごと台湾フェア」は、区民の皆さんに台湾の魅力を多角的に紹介するイベントとして企画されました。駐日代表処や関係機関、友好団体や台湾専門家のご協力をいただきながら、観光スポットや文化の紹介、物産展、台湾料理やデザートワゴン販売、講演会などを中心に毎年工夫を凝らして開催しています。台湾映画を楽しみに来場される常連の人もいます。これまでに上映したのは、「KANO」（2015年）、「太陽の子」（2016年）、「光にふれる」（2017年）、「ママ、ごはんだ？」（2018年）、「星空」（2019年）、「52Hzのラブソング」（2020年）。時には監督や出演した俳優が会場に駆けつけて、ステージ挨拶が行われることもあります。



まるごと台湾フェア講演会

東京高円寺阿波おどり台湾公演

2015年には台北市、2017年に台北市と新北市で公演を行いました。

3回目となった2019年は、より多くの台湾市民に楽しんでいただけるように、新たに台湾中部の台西郷、北港鎮、南部の高雄市での公演も開催しました。

過去最多の総勢160名の踊り手が、4月下旬の3日間にわたり流し踊りや組み踊りの演舞を披露しました。

公演が行われた各地の沿道は、公演前から多くの観衆で溢れ、踊りに合わせてリズムを取りながら阿波おどりの魅力を楽しんでいました。

また、台湾の市民を対象に踊り手が直接指導する体験型教室を開催し、市民交流を深めると共に高円寺への興味を高め、杉並への新たな観光資源を創出しました。



阿波おどり台湾公演

杉並区と台湾とのつながり

日本に暮らす外国籍の人たちの統計（在留外国人統計）から杉並区の特徴が浮かび上がります（表1参照）。2020年末の日本の在留外国人は288万7,116人、台湾籍の人たちは8位（5万5,872人）で全体に占める割合は1.9%です。東京都区部（在留外国人45万6,873人）では6位（1万6,054人）で3.5%。杉並区では5位（853人）で5.1%です。杉並区で台湾の人たちの割合が高いのはなぜでしょう。何か理由がありそうです。

『台湾人の歌舞伎町—もうひとつの戦後史』（稲葉佳子・青地憲司著、紀伊国屋書店、2017年）によると、焼け野原になった新宿の再開発で重要な役割を果たしたのが台湾の人たちでした。中心人物のおひとりが林以文（リンイブン）さん。林さんは1937（昭和12）年に台湾から中央大学に内地留学し、戦後は製薬会社での勤務を経て、新宿を拠点にエンターテインメントや不動産事業を手広く展開しました。1970年代までの新宿は名曲喫茶やキャバレー、クラブ、ライブハウスなどがひしめく一種の文化的解放区でした。林さんは高円寺に住み、事業の拡大とともに増える従業員のために荻窪や阿佐ヶ谷にアパートや借家を準備して受け入れ体制を整えていきます。日本統治時代の出身者は1952年に日本国籍を喪失させられました。日本国籍を持たずに日本社会で生

き抜くには仲間同士で助け合うしかありません。台湾人ネットワークで救われた人の中には台湾から引き揚げてきた日本の人たちも含まれていました。林さんたちが活躍した「台湾人の歌舞伎町」と呼べるのは1970年代初頭までです。

移動は人と人との関係の結果として生じます。2010年代以降の杉並区と台湾との交流の始まりは野球交流でしたが、こうした台湾の人たちとの歴史的なつながりが底流で支えているのかもしれません。グローバル化によって国家単位で考えるだけでは解けない問題が多くなり、政治の世界の論理とは別に人と人との関係性がより重要になってくる時代を迎えています。杉並区と台湾の人たちの交流活動は、ミクロでローカルな視点を維持しながらグローバルな視点をもった信頼関係の基盤づくりにつながっているように思います。

2011年の中学生野球交流で始まった台湾とのつながりは、現在、交流自治体の名寄市、南相馬市、南伊豆町における台湾の高校生の修学旅行受入れや北塩原村、東吾妻町における中学生の台湾の学校訪問が実施されるなど、地域を超えて交流の輪を広げています。



台湾友好親善ツアー



台湾友好親善ツアー集合写真

表1：在留（在住）外国人統計（全国・東京区部・杉並区の比較）

| | 全国 | 人数 | 構成比 (%) | 東京区部 | 人数 | 構成比 (%) | 杉並区 | 人数 | 構成比 (%) |
|----|--------|-----------|---------|-------|---------|---------|-------|--------|---------|
| 1 | 中国 | 778,112 | 27.0 | 中国 | 188,005 | 41.2 | 中国 | 5,682 | 34.0 |
| 2 | ベトナム | 448,053 | 15.5 | 韓国 | 74,369 | 16.3 | 韓国 | 2,491 | 14.9 |
| 3 | 韓国 | 426,908 | 14.8 | ベトナム | 28,350 | 6.2 | ネパール | 2,127 | 12.7 |
| 4 | フィリピン | 279,660 | 9.7 | フィリピン | 24,754 | 5.4 | ベトナム | 1,391 | 8.3 |
| 5 | ブラジル | 208,538 | 7.2 | ネパール | 21,174 | 4.6 | 台湾 | 853 | 5.1 |
| 6 | ネパール | 95,982 | 3.3 | 台湾 | 16,054 | 3.5 | 米国 | 726 | 4.3 |
| 7 | インドネシア | 66,832 | 2.3 | 米国 | 14,901 | 3.3 | フィリピン | 545 | 3.3 |
| 8 | 台湾 | 55,872 | 1.9 | インド | 12,413 | 2.7 | 英国 | 293 | 1.8 |
| 9 | 米国 | 55,761 | 1.9 | ミャンマー | 8,663 | 1.9 | フランス | 225 | 1.3 |
| 10 | タイ | 53,379 | 1.8 | タイ | 6,206 | 1.4 | タイ | 217 | 1.3 |
| | その他 | 418,019 | 14.0 | その他 | 61,984 | 13.6 | その他 | 2,185 | 13.1 |
| | 総数 | 2,887,116 | | 総数 | 456,873 | | 総数 | 16,735 | |

注：全国（2020年12月末現在）、東京区部、杉並区（2021年1月1日現在）
出典：全国（法務省在留外国人数）、東京区部（東京都総務局 外国人人口）